

日蓮大聖人御書全集

うえののあまごぜんごへんじ

上野尼御前御返事

おりよういりよう こと

(烏竜遺竜の事)

新版
1912
〜
1916

うえののあまごぜんごへんじ おりよういりよう こと

上野尼御前御返事 (烏竜遺竜の事)

こうあん ねん がつ にち さい うえののあま

弘安3年('80) 11月15日 59歳 上野尼

こめ いちだしとじよう 洗 芋 ひとたわら おく た

麁牙一駄四斗定・あらいいも一俵、送り給びて、

なんみようほうれんげきよう とな

南無妙法蓮華経と唱えまいらせ候い了わんぬ。

みようほうれんげきよう もう はちす たと そうろう てんじよう

妙法蓮華経と申すは、蓮に譬えられて候。天上には

まかまんだらけ にんげん さくら はな はな

摩訶曼陀羅華、人間には桜の花、これらはめでたき花なれ

はな ほけきよう たと ほとけと たも

ども、これらの花をば法華経の譬えには仏取り給うことな

いっさい はな なか と わ はな ほけきよう たと

し。一切の花の中に、取り分けてこの花を法華経に譬えさ

たも ゆえそうろう ぜんけごか もう

せ給うことは、その故候なり。あるいは前花後菓と申し

て、花は前に菓は後なり。あるいは前菓後花と申して、菓は

さき はな さき み のち はな のち いっけたか たかいつか

前に花は後なり。あるいは一花多菓、あるいは多花一菓、

あるいは無花有菓と、品々に候えども、蓮華と申す花は菓

と花と同時なり。一切経の功德は、先に善根を作して後に

仏とは成ると説く。かかる故に不定なり。法華経と申すは、

手に取ればその手やがて仏に成り、口に唱うればその口即

ち仏なり。譬えば、天月の東の山の端に出ずれば、その時

即ち水に影の浮かぶがごとく、音とひびきとの同時なるが

ごとし。故に、経に云わく「もし法を聞くことあらば、一

じようぶつ

うんぬん もん こころ

きよう

りとして成仏せざることなけん」云々。文の心は、この経

たも

ひと

ひやくにん

ひやくにん

せんにん

せんにん

いちにん

を持つ人は、百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人

欠

ほとけ

な

もう

もん

もかけず仏に成ると申す文なり。

ごしようそく

みそうら

あまごぜん

じぶ

こまつののろくろう

そもそも、御消息を見候えば、尼御前の慈父・故松野六郎

ぎえもんにゆうどうどの

きにち

うんぬん

しそくおお

こうよう

区

々

左衛門入道殿の忌日と云々。子息多ければ孝養まちまちな

かなら

ほけきよう

ほうぼうとううんぬん

り。しかれども、必ず法華経にあらざれば、謗法等云々。

しゃかぶつ

こんく

せつ

のたま

せそん

ほうひさ

のち

かなら

釈迦仏の金口の説に云わく「世尊は法久しくして後、要

まさ

しんじつ

と

たほう

しやうみよう

い

ず当に真実を説きたもうべし」と。多宝の証明に云わく

みようほうれんげきよう

みな

しんじつ

じつぼう

しよぶつ

ちか

「妙法蓮華経は、皆これ真実なり」と。十方の諸仏の誓い

に云わく「舌相は梵天に至る」云々。

これより、ひつじさるの方に、大海をわたりて国あり。

漢土と名づく。彼の国には、あるいは仏を信じて神を用い

ぬ人もあり、あるいは神を信じて仏を用いぬ人もあり。あ

るいは日本国も、始めはさこそ候いしか。しかるに、彼の

国に烏竜と申す手書きありき。漢土第一の手なり。例せば、

日本国の道風・行成等のごとし。この人、仏法をいみて経

をかかじと申す願を立てたり。この人死期来つて重病を

うけ、臨終におよんで子に遺言して云わく「汝は我が子な

り。その跡絶えずして、また我よりも勝れたる手跡なり。

あとた あくえん われ すぐ しゆせき

たといいかなる悪縁ありとも、法華經をかくべからず」と

云々。しかして後、五根より血の出ずること泉の涌くがご

とし。舌八つにさけ、身くだけで十方にわかれぬ。しかれ

うんぬん のち ごごん ち い いずみ わ

ども、一類の人々も、三悪道を知らざれば、地獄に墮つる

したやっ 裂 み 碎 じつぼう 分 いちるい ひとびと さんあくどう し じごく お

先相ともしらず。

せんそう 知

その子をば遺竜と申す。また漢土第一の手跡なり。親の跡

こ いらよう もう かんどだいいち しゆせき おや あと

を追って法華經を書かじという願を立てたり。その時、大王

お ほけきよう か がん た とき だいおう

おわします。司馬氏と名づく。仏法を信じ、殊に法華經を

しばし な ぶつぼう しん こと ほけきよう

おわします。司馬氏と名づく。仏法を信じ、殊に法華經を

仰 たま

おな

わ くに

なか

しゆせきだいいち

もの

あおぎ給いしが、同じくは我が国の中に手跡第一の者にこ

きよう か

じきよう

いりよう

め

りようもう

の経を書かせて持経とせんとて、遺竜を召す。竜申さく

ちち ゆいごん

ゆる

たま

うんぬん

だいおう

ちち

「父の遺言あり。こればかりは免し給え」と云々。大王、父

ゆいごん

もう

ゆえ

た

しゆせき

め

いっきよう

写

お

の遺言と申す故に、他の手跡を召して一経をうつし畢わん

みこころ

かな

たま

ぬ。しかりといえども、御心に叶い給わざりしかば、また

いりよう

め

い

なんじ

おや

ゆいごん

もう

ちん曲

きよう

遺竜を召して言わく「汝、親の遺言と申せば、朕まげて経

うつ

はちかん

だいまく

ちよく

したが

を写させず。ただし、八巻の題目ばかりを勅に随うべし」

うんぬん

かえ

がえ

じ

もう

おういか

い

なんじ

ちち

と云々。返す返す辞し申すに、王瞋つて云わく「汝が父と

わ

しん

おや

ふこう

おそ

だいまく

か

いちよく

いうも我が臣なり。親の不孝を恐れて題目を書かずば、違勅

とが

ちよくじようたびたびおも

ふこう

の科あり」と勅定度々重かりしかば、不孝はさることな

とうぎ

せ

脱

難

ほけきよう

げだい

れども、当座の責めをのがれがたかりしかば、法華経の外題

か

おう

あ

いえ

かえ

ちち

墓

む

ち

なみだ

を書いて王へ上げ、宅に帰って父のはかに向かつて血の涙

なが

もう

よう

てんし

せ

おも

な

ちち

を流して申す様は、「天子の責め重きによつて、亡き父の

ゆいごん

違

すで

ほけきよう

げだい

か

ふこう

せ

遺言をたがえて、既に法華経の外題を書きぬ。不孝の責め

まぬか

なげ

みっか

あいだ

はか

はな

じき

た

免れがたし」と歎いて、三日の間、墓を離れず、食を断ち、

すで

いのち

およ

既に命に及ぶ。

みっか

もう

とらのとき

ぜっし

お

ゆめ

三日と申す寅時に、すでに絶死し畢わつて夢のごとし。

こくう

み

てんにんいちにん

虚空を見れば、天人一人おわします。帝釈を絵にかきたる

たいしゃく

え

描

むりよう けんぞく てんち じゅうまん

がごとし。無量の眷属、天地に充滿せり。ここに竜問う

い ひと こた い なんじし われ

て云わく「いかなる人ぞ」。答えて云わく「汝知らずや。我

ちち おりよう われ じんげん とき げてん しゆう

はこれ父の烏竜なり。我、人間にありし時、外典を執し、

ぶつぼう 敵 こと ほけきよう かたき ゆえ

仏法をかたきとし、殊に法華経に敵をなしまいらせし故に、

むけん お ひび した 抜 すうひやくど

無間に墮つ。日々に舌をぬかるること数百度、あるいは死し、

い てん あお ち ふ 歎 かな

あるいは生き、天に仰ぎ地に伏してなげけども、叶うこと

じんげん っ おも たよ なんじ わ こ

なし。人間へ告げんと思えども、便りなし。汝、我が子と

ゆいごん もう ことばほのお な み せ

して遺言なりと申せしかば、その言炎と成つて身を責め、

つるぎ な てん ふ くだ なんじ ふこうきわ な

劍と成つて天より雨り下る。汝が不孝極まり無かりしか

りようと

ども、我が遺言を違えざりし故に、自業自得果、うらみが

たかりしところに、金色の仏一体、無間地獄に出現して、

『たとい、法界に遍き、善を断ちたる諸の衆生も、一た

び法華経を聞かば、決定して菩提を成ぜん』云々。この仏、

無間地獄に入り給いしかば、大水を大火になげたるがごと

し。少し苦しみやみぬるところに、我合掌して仏に問い

奉つて『いかなる仏ぞ』と申せば、仏答えて『我は、

これ汝が子息・遺童が只今書くところの法華経の題目

六十四字の内の妙の一字なり』と言う。八巻の題目は八八

ろくじゅうし ほとけ ろくじゅうし まんげつ な たま むけんじごく だいあん

六十四の仏、六十四の満月と成り給えば、無間地獄の大閻

すなわ だいみょう うえ むけんじごく とうい すなわ みょう

即ち大明となりし上、無間地獄は、『当位は即ち妙なり。

ほんい あらた もう じょうじゃつこう みやこ な

本位を改めず』と申して、常寂光の都と成りぬ。我お

ざいにん みな はちす うえ ほとけ な ただいまとそつ ないいん

よび罪人とは、皆、蓮の上の仏と成つて、只今都率の内院

のぼ まい そうろう なんじ つ うんぬん

へ上り参り候が、まず汝に告ぐるなり」と云々。

いりようい わ て か きみ 助 たも

遺竜云わく「我が手にて書きけり。いかでか君たすかり給

わ ころろ 書

うべき。しかも我が心よりかくにあらず。いかに、いかに」

もう ちちこた い なんじ 果 無 なんじ て わ て

と申せば、父答えて云わく「汝はかなし。汝が手は我が手

なんじ み わ み なんじ か じ われ か じ

なり。汝が身は我が身なり。汝が書きし字は我が書きし字

なり。汝、心に信ぜざれども、手に書く故に、既にたすか

なんじ

こころ

しん

て

か

ゆえ

すで

助

りぬ。譬えば、小児の火を放つに、心にあらざれども、物を

たと

しょうに

ひ

はな

こころ

もの

や

焼くがごとし。法華経もまたかくのごとし。存外に信を成せ

かなら

ほとけ

成

ぎ

し

ぼう

ぞんがい

しん

な

ば、必ず仏になる。またその義を知つて謗ずることなかれ。

ざいけ

言

ことさらだいきい

ただし在家のことなれば、いいしこと故大罪なれども、

ざんげ

易

うんぬん

懺悔しやすし」と云々。

だいおう

もう

だいおう

い

わ

がん

すで

このことを大王に申す。大王の言わく「我が願、既に

験

あ

いりよう

ちようおん

こうむ

くに

挙

しるし有り」とて、遺童いよいよ朝恩を蒙り、国またこそ

おんきよう

あお

たてまつ

つてこの御経を仰ぎ奉る。

こころうどの にゆうどうどの

あまごぜん ちち

こ

しかるに、故五郎殿と入道殿とは、尼御前の父なり、子

あまごぜん

か

にゆうどうどの

娘

いま

にゆうどうどの

なり。尼御前は彼の入道殿のむすめなり。今こそ入道殿は

とそつ

ないいん

まい

たも

よし

伯 耆 殿

読

聞

都率の内院へ参り給うらめ。この由をはわきどの、よみきか

たま

そうら

ことごと

恩

々

詳

もつ

せまいらせ給い候え。事々そうそうにて、くわしく申さず

そうろう

きようきようきんげん

候。恐々謹言。

じゆういちがつじゆうごにち

十一月十五日

にちれん

かおう

日蓮

花押

うえのあま 御 前 ごへんじ

上野尼ごぜん御返事